

私のお目当てのアーティストは出番が遅いから、昼過ぎに来ればそんなに駅周りは混雑していないだろうと思ったけれど……、それは間違いだったらしい。

テンションが上がった人たちでごった返す駅前。
その誰もが一目見れば目当てのアーティストが分かる
装備をしている。
待ち合わせをしている先輩の姿を探すのは大変そうだ。

そう思っていると、私に向かって満面の笑みで足早に
近づいてくる先輩が目に入った。

「夢子ー！」

手を振りながらこちらへ歩いてくる、子どもみたいな
笑顔。

その後ろには、いつも通り感情の読みにくい顔をした
もう一人の先輩。

「蒼介(そうすけ)さん、律(りつ)さん、お疲れ様ですー！」

私も、先輩たちに手を振ってそちらへ軽く歩き出した。

二人とも同じ会社の先輩だ。

部署は違うけれど、好きな音楽やアーティストが近いこともあってよくフェスやライブに行く仲だった。

今日もそうだ。三人でフェスを楽しむ予定。

蒼介さんはよく目立つ人だ。

背も高いし体もしっかりしているし、よく笑う。

明るい髪色は彼の笑顔と同じように太陽に透けてキラキラと眩しいし、フェスを全力で楽しみに来ました！みたいな格好もすごく蒼介さんらしい。

逆に律さんはあまり目立つことを好まない人だ。

感情をあまり表情に出さないし、騒がしい場所でも一歩引いているタイプ。

それでも好きな音楽の話になると急に口数が増えたりして、シャープな印象の顔に笑顔が見えるとなんだか得した気分になる。

「夢子、昼飯食った？ オレおにぎりなら持ってるぞ」

駅から歩いてすぐの会場へ向かっていると、蒼介さんがそう言って覗き込んできた。

「食べてきました」

そう答えると、逆側から律さんが覗き込んでくる。

「夢子ちゃん飲み物は？ いる？ 開けてないのあるけど」

「自分の持ってますよ、ありがとうございます」

二人の親切を、胸の前で手を振って断る。

二人はすごく優しい。

会社でもプライベートでもそうだ。

最初は先輩だからだと思っていた。

でもさすがにもう分かる。

私に気がある。蒼介さんも律さんも。

だからと言って、何か言われたりとかされたりとかはない。

私も気付かないふりを続けている。

この関係が居心地がいいから。

……あと正直、先輩二人に気をもたれるのって悪い気がしない、から。

会場になると駅の混雑なんて比じゃないくらいの人。ステージ前なんて特にもみくちゃになっていた。

私たちはそれぞれのお目当てのアーティストまで後方で楽しむことにした。

三人で並んでフェスの空気を楽しむ。

今回初めて聴くアーティストも予習はしてきたつもりだったけれど、やっぱり生で浴びると格別だ。

私たちはときどき感想を言い合いながらステージを眺めた。

ふと、風が吹いた。

今まで風がなかったわけじゃない。

でも今までとは感じが違う。

「……降りそう」

律さんの声がして空を見上げると、確かにさっきまで青かった空に重い灰色の雲が広がっていた。

「これ、やばくないですか？ 雨来ますよね」
「絶対降る！ 頼むから夕方まで持ってくれ～～！！」

蒼介さんの叫びもむなしく。

ぽつり。

頬に雨粒が当たったかと思えば。

会場のあちこちで悲鳴が上がった。
一気に降り始めた。

レインコートを着る暇もなかった。周りの人たちの服の色があっという間に変わっていく。

「こっち！」

蒼介さんは首にかけていたタオルを素早く私の頭にかぶせると、手首を掴んで私を引っ張った。

ステージ後方の人波が一斉に雪崩れ込んで来て、私たちもそれに紛れて走った。

結局、フェスは一時中断。

私は先輩二人が張っていてくれたテントに避難した。

ドドドドドドッ！

布を叩く音で外の音が何も聞こえない。

この大きな音が止むまではきっとフェスは再開しないだろう。

……にしても。

「狭くてごめんなー！まさかこんな雨が降るとは思わなくて」

「いえ、テント本当にありがとうございます、助かりました」

あくまで日除けと荷物用だったテントはすごく狭い。

入り口を閉めて三人で座ってしまうとあまり身動きが取れない。

私は二人に挟まれる形で膝を抱えて座っていた。

二人に触れないように身を縮こませていたのだ。

「夢子、そのタオル使ってもいいから髪拭きな」

「そんな…悪いですよ」

「悪いわけあるか、じゃあオレが拭いてやる！」

「え……っ」

気を遣っていたのに、蒼介さんはそういうと私の背後に回り込んできた。

その最中ですら蒼介さんの大きな体がテントに触れて布が引っ張られる。

「夢子ちゃん俺も新しいタオルあるよ、これで体も拭こ」

「ありがとうございます……」

律さんまで。

隅にあったバッグからタオルを取り出し、そのタオルを私に渡してくれるのかと思いきや。

私の体にそのタオルを当て始めた。

髪は蒼介さんに、体は律さんにタオルを優しく押し当てられている。

(なに、これ……)

空気が変わっていく。

この狭いテントの中で二人が私に触れている。

なんだかくすぐったい。どうしていいのかわからない。

二人はしばらくそうしてタオル越しに私の体に触れていた。

「夢子、寒い？」

寒いどころか体は火照ってきていたけれど、蒼介さんの手は私の体に巻き付いた。

後ろから回された腕がお腹の辺りで交差する。

背中に蒼介さんの体温を感じる。

「え、あの、」

「風邪引くなよー」

抱きしめられてしまった。

すると正面の律さんが一瞬、私の後ろの蒼介さんを見て。

それからぽんぽんと動かしていたタオルではなく、手で私の腕に触れてきた。

体が固まる。狭いテントの中の空気が湿度を増す。

「……夢子、ちょっとだけ触っていい？ こんなにくっついてたらさすがに我慢すんの無理かも」

「あ、」

お腹に巻かれていた蒼介さんの腕が離れてすぐ、大きな手のひらが私の胸を包んだ。

「夢子さあ、オレたちが夢子のこと好きなの気付いてるよなあ？ それでも一緒に遊んでくれんだから、多少は期待しちゃうんだけど？」

「……もしかしてどっち選ぶか決めかねてるの？ だとしたら、まだ俺たち両方見てるってことでいい？」

ただ撫でていた律さんの手も、その感触を思い知らせるように私の指の先から手、腕まで滑っていく。

それから肩まで来て、首筋をなぞって、頬に触った。

律さんの体が前から覆い被さるように近付いて、私はいよいよ二人に完全に挟まれる形になってしまった。

……いつか、こうなるんじゃないかって思わなかったわけじゃない。

それが二人同時にくるなんて予想もしていなかったけ

れど。

「夢子のおっぱいやわらけ〜♡ 幸せすぎる……」

「ずるい、俺も触らせて」

素直に蒼介さんの手が離れて、すぐに律さんの細い手が胸を包んだ。

優しく、感触を楽しむように動く手。

ぞわぞわ……♡♡

くすぐったいのとは違う、体の奥から淡いざわつきが侵食してくる。

ただ柔らかさを楽しんでいるようだったその手は、私が嫌がる素振りを見せないでいると次第に指先が何かを狙ったように動き始めた。

さわ♡ さわ♡

手のひらで胸を支えて、指だけが上下左右に動く♡

さわ♡ さわ♡

下着と服を隔てているから何も感じなかったのに。

くに♡

指に少しだけ角度をつけられると。

「…っ、」

息が漏れた。

頂点の薄い皮膚を軽く押し込まれて、じんわりと熱を持つ。

くに…♡ くに♡ くに♡ すり♡ すり♡

後ろから蒼介さんに抱きしめられ、前からは律さんに覆われて、私は俯いたまま息を漏らした。

すり♡ くに♡ くに♡ すりすり♡ くに♡ くに♡

「……、っ、…、……っ」

二人の指先が、的確にそこを狙って服に沈み、そのまま上下に動く…♡

鈍い刺激が薄い皮膚を引き攣らせて、敏感になっていく。

すり…♡ すり、すり♡ すり……♡

「……♡ …っ、……♡」

テントに打ちつける雨で私から漏れる声なんて絶対聞こえないだろう。

でも後ろからは蒼介さんが、前からは律さんが私を覗き込んできた。

「夢子、こういうの嫌じゃないんだな？」

「もっとしていいの？」

私が何も答えないでいると、二人の指はもっと大胆になった♡

すり♡ すりすり♡ すりすりすり♡

くに♡ くに♡ くに♡ さすさすさす…♡

「っ♡ ……ツ、……♡」

しつこく触られれば勃起あがってしまう♡

二人の指にはそれがバれているだろう、狙いを定めてそこばかりを摩擦してきた♡

「体びくってしてる♡ 気持ちいいんだな♡」

「特に下から上に擦られるのが好き…？ もうちょっと強くしてもよさそう」

更に指で押される♡

服の下で乳首がえぐられるように撫で上げられた♡

「うあっ♡♡」

思わず声が漏れる♡

「いいみたいだな♡ じゃあもっと……♡」

「あッ、あ…♡♡」

二人の指は、

きゅ……♡♡

布越しの勃起乳首を挟む♡

それなりの圧で挟まれているはずなのに布の厚みでその刺激は柔らかい♡

挟まれたそこはそれぞれ、

きゅむ♡ きゅっ♡ こりこり♡ こりこり♡

「あっ♡ あ♡あ♡ あッ♡」

揉み込んだりゆるくこねられた♡♡

「声出しても大丈夫だぞ、どうせ雨の音で外になんて聞

こえないんだから♡」

「俺たちにだけ聞こえれば充分」

きゅ♡ きゅう♡ くりくり♡♡ こりこりこり♡♡

きゅう……、♡♡ きゅ、きゅ、きゅ♡♡ ぐに♡♡ ぐに♡♡ ぐに♡♡

乳首、熱い……♡♡♡

自分でするのは違う、この刺激を欲しがるようにとんでもなく勃起して布を押し上げているのが分かる♡

蒼介さんの乳首全体に圧をかける指と、律さんの細かに刺激を送ってくる指♡

私は蒼介さんの腕の中で体を震わせる♡

それだけじゃない♡♡♡

「……夢子ちゃん、気付いてる？ 足もどもぞしてるの。もしかしてここも触ってほしい？」

正面にいる律さんがそう言って私の足を撫でた♡

腿の内側にぎゅ、ぎゅって力を入れていただけのつもりがバレてしまったらしい♡♡

「触っていいよね、駄目だったらちゃんと言って」

そう言いながらその手はゆるく履いていた私のカーゴパンツを下着ごと抜き取ろうとしている♡

私も腰を上げる♡ もう誤魔化せない♡♡♡

雨の勢いと音で遮断された、狭くてほんのり暗いテントの中、私は下半身を晒してしまった♡

「……濡れてるね。かわいい」

律さんは私の腰を両手で掴むと、そのまま引いた♡
ずるり、蒼介さんの体を滑り仰向けに寝転がされる♡
♡

足を伸ばすこともできないテントの中で、私の足は律さんの体を挟んで開くしかない♡

足を開いて、濡れているらしいそこを律さんに向けている♡♡

「あー、すごく興奮する…。気持ちよくしてあげるからね」

律さんが屈んだ♡

黒い髪が降りてきて、私のお腹の辺りに触って、それから♡

……ちゅ♡♡

クリトリスにかぶった皮にキスされた♡♡♡

ちゅ♡ ちゅ♡

何度かキスして♡

ちゅぷ♡♡

唇で包んで♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅっ♡

またキスして♡

ちゅぷ……♡

さっきよりも深く口に含む♡

ちゅ……、ちゅ♡

そのまま吸われ♡

ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ♡

軽く吸引された♡

「んあ……ッ♡ あ♡ あ♡♡ 律、さん…っ♡♡」

足の指がその気持ちよさを逃がそうと開いたり閉じたりする♡♡

律さんは私の太ももを押さえつけ更に顔を沈めた♡

ちゅ♡ ちゅっ、ちゅっ♡♡

ちゅる、ちゅ♡♡ ぢゅ♡♡ ぢゅ♡♡ ちゅぷちゅぷち

ゆぶ♡♡

ぢゅ……ツツ♡♡ ぢゅっ♡♡♡

「あっあッ♡♡ あ、は、♡♡♡ ああっ、あ♡♡」

そこに血が流れ込んでいくみたい♡

クリトリスが一気に勃起していくのが分かる♡♡

過敏になって、律さんの唇の感触をはっきりと感じ取ってしまう♡♡

「律のクンニ、気持ちいい？ こっちももっと気持ちよくしてあげたいな♡♡」

蒼介さんの手が私のTシャツを捲り上げると、背中に回ってきた♡

ブラジャーのホックを外されTシャツごと首元まで捲り上げられる♡♡

自分でも分かっていたけど予想以上に勃起した乳首を上を向いた♡♡

私の頭を膝に乗せ見下ろしている蒼介さんの目が一気にギラつく♡♡

「ビンビンの乳首可愛すぎ……♡ どうするのが好き？
こう、とか？」

ぴん♡

ぴん♡ ぴん♡ ぴん♡

両乳首に添えられた指が上下に乳首を弾く♡♡

「あッ♡ あ、んっ♡♡ や、ッあ♡♡ あ♡♡」

「これは？♡♡」

すり……♡♡ すりすり♡♡ すり♡♡ すり♡♡

乳首の下側に当てられた指を左右に擦るように動かされた♡

勃起の幹だけを摩擦され、乳輪がきゅっ♡と締まる♡♡

「ふあッ♡ …ん♡♡ んっ♡♡ ……ッ♡♡」

「じゃあ、こう……」

ふわり、乳首の上下を優しく挟まれ♡♡

……しこお♡♡♡

付け根から先端まで撫でられた♡♡♡

「うゝ ……んッッ！♡♡♡」

「あは、これいいんだ？♡♡」

背中がビクリと浮いて蒼介さんの膝に頭を押し付けてしまった♡

蒼介さんは嬉しそうにニやついてその動きを繰り返した♡♡

しこお♡♡ しこ♡♡ しこ♡♡
「…っん♡♡ あ♡♡ あ…、あ♡♡」
蒼介さんは乳首をしごき♡
ちゅぷ♡♡ ちゅ♡ちゅ♡ちゅッ♡♡
「は、…ッ♡♡ あ♡♡ あんっ♡♡」
律さんはクリトリスにキスをする♡♡

しこ♡♡ しこお♡♡ しこお♡♡ しこお……♡♡ し
こしこしこ…♡♡♡
ちゅ♡♡ ちゅッ♡♡ ちゅぷ、ちゅぷ♡♡ ちゅ……
ッ♡♡♡

「あッ、あ♡♡ ア♡♡ こ、こんな……♡♡♡ あ、あ
あ♡♡」

体をくねらせてしまう♡
二人の間で無防備に転がった私の、乳首もクリトリス
も敏感に勃起し、二人に弄ばれ♡♡♡

「乳首こんなに尖らせて…♡♡ えっちすぎるだろ♡
♡」

「……ここも、クリ強く吸うたびに収縮してる、好きな
んだ、吸われるの」

二人も興奮したように呼吸が浅くなっている♡♡♡

しこしこしこっ♡♡ しこしこしこっ♡♡ しこしこし
こっ♡♡

ぢゅッ♡♡ ぢゅっ、ぢゅるッ♡♡ ぢゅるるッ♡♡
ぢゅるるッ♡♡

優しくった手つきは少しだけ強くなって私を追い込んだ♡♡

しこしこしこっ♡♡ しこしこしこっ♡♡ しこしこし
こっ♡♡

ぢゅるるっ♡♡ ぢゅるるッ♡♡ ぢゅるるっ、ぢゅる
るッ♡♡

「あッ♡♡あ、あッ♡♡ ま、まって、だめです、……
ッ！♡♡」

「足パカーって開いてきた♡ 夢子イきそうなんだろ♡
♡」

「クリの先端、弱いよね、ここばっか吸っててあげる」

しこしこしこしこしこっ♡♡♡ しこしこしこしこし
こしこっ♡♡♡

ぢゅるるッッ♡♡♡ ぢゅるるッッ♡♡♡ ぢゅるるッ
ッ♡♡♡ ぢゅるるッッ♡♡♡

規則的な動き♡♡

乳首もクリトリスも研ぎ澄まされてしまう♡♡♡♡

手足とお腹の奥に力がこもって、体の中で絶頂感が膨
らむ♡♡♡♡

「……あ、ん`、んんんッッ♡♡ イ、っちゃうう♡♡
イっちゃ……、」

しこしこしこしこしこしこしこしこ……っ♡♡
♡

ぢゅるるるッッ♡♡♡ ぢゅるるるッッ♡♡♡ ぢゅる
るるッッ ぢゅるるるッッ♡♡♡

足の指が丸まって♡♡

私は思わず口を塞ぐ♡♡♡♡

「イ、く……、……………ン` っっっ！！！！♡♡♡
♡♡」

背中と腰を丸め、体が縮こまる♡♡

イってしまった……♡♡♡♡

テントの中とはいえ外なのに♡♡ 周りにも他の人が
いるのに♡♡♡♡

「たまんねー……♡♡♡」

「……」

余韻が引く前に、蒼介さんは私の上半身を床へ下ろすと、狭いテントの中で背中を丸め私の胸に唇を下ろしてきた♡♡

それと同時♡ 下半身では濡れた割れ目を律さんの指がなぞり、指がそのまま入ってくる♡♡

「ッッ、あ……！？」

べろっ♡♡♡

ぐちゅ♡♡♡

勃起した乳首を舐められ、おまんこに指を挿入されて♡♡

余韻を逃がそうとしていた体にまた、気持ちいい刺激を与えられる♡♡

「ちょ、っと、待、」

慌てて手で制止しようとしたけれど、

ぢゅ…………っ！♡♡♡♡

まるっと口に含まれたクリトリスをきつく吸引され♡

♡

「…………お♡♡♡♡♡」

体が硬直すると♡♡♡

ぐちゅちゅちゅちゅちゅっ！♡♡♡

一気に律さんの指が動いた♡♡

指の腹でおまんこの入り口の少し上を押し上げながら、
前後に動かされる♡♡♡

「あゝ、……ツツ、♡♡♡ お♡♡ お♡♡ ま、って、
……！！♡♡♡♡」

ぢゅッ♡♡ ぢゅぽッ♡♡ ぢゅぽッ♡♡ ぢゅ……ツツ
ぽ♡♡♡ ぢゅー…………っぽ！♡♡♡

そしておまんこの中、指で揺らされながらのクリ吸引
♡♡

床についていた足が飛び上がって、また開く♡♡

「お♡♡ おッ♡♡ おッ♡♡ イったばっか、なのに…！
♡♡ だめっ♡♡ お” ……ツッ♡♡♡」

「夢子そんな声出すんだあ♡♡ すっげえちんぽにク
♡♡♡ もーっと気持ちよくしてあげたい♡♡」

べろお♡♡♡

蒼介さんの伸ばした舌がねっとりと乳首を舐め上げ♡
♡

れる♡♡れるお♡♡

その勃起に絡みつки♡♡

レロレロレロレロツッ♡♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡ べろ
べろべろべろべろツッ♡♡♡♡

舐め回し、ときどき勃起を手伝うように吸い上げて、
また舐め回して……♡♡♡

そうしながら反対の乳首は指でカリカリッ♡とくすぐ
っている♡♡♡♡

「……お” ♡♡ おッおッおッ♡♡ やだ♡♡ こんな♡♡
ほおッ♡♡ お……ツッ♡♡♡♡♡」

ぢゅ〜〜〜〜〜ツッ！♡♡♡♡♡ ぢゅッぽ！♡♡
ぢゅッぽ！♡♡ ぢゅッぽ！♡♡

敏感なクリトリスは皮ごと吸い上げられ♡♡♡

ぐちゅちゅちゅちゅちゅっ！♡♡♡ ぐちゅちゅちゅ

ゆちゆちゅっっ！♡♡♡

おまんこは押し上げる指の腹で擦られ♡♡♡

べろべろべろべろべろッ♡♡♡ ぶちゅッ♡♡ れる
れるれるれるれるッ♡♡♡

カリカリカリッ♡♡♡ カリカリカリカリッ♡♡
♡

乳首は縦横無尽に舐め回され、爪先で搔かれる♡♡

ぢゅッッぽ！♡♡♡ ぢゅッッぽ！♡♡♡ ぢゅッッぽ
！♡♡♡ ぢゅッッぽ！♡♡♡ ぢゅッ、ぢゅ〜〜〜〜
ッッッ！♡♡♡♡

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ！♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅ
ぢゅッッ！♡♡♡

ぢゅッッ、べろべろべろべろべろっ！♡♡♡ ぢゅう
ッ、レロレロレロレロレロレロッッ！♡♡♡

カリカリカリカリッ♡♡♡ カリカリカリカリカリ
ッ♡♡♡

「お、おおお♡♡♡ きもち、い”、……！♡♡ きもち
よくなっちゃう” うう……！♡♡♡♡ おッおッ♡♡♡
お、ほオ”♡♡♡」

二人は何も言わずただひたすらにクリトリスと乳首を
愛撫し続けた♡♡

私のことをイかせようとしているのが伝わってくる♡
♡♡

乳首もクリトリスも勃ちっぱなしだし、おまんこは指
が動くたびに水音が鳴る♡♡

「……………〜〜〜〜ッ” ッ” !!♡♡♡♡ ふ、う” う
う……… !♡♡♡♡」

ぢゅッ!♡♡ ぢゅううう〜〜〜ッッ!♡♡♡♡ ぢゅ
ッぽぢゅッぽぢゅッぽぢゅッぽ!♡♡♡♡

ぐぢゅぢゅぢゅぢゅッッ!♡♡♡ ぐぢゅぢゅぢゅぢゅ
ぢゅッッ!♡♡♡

ぢゅッッ!♡♡ れるれるれるれるれるッッ!♡♡♡
ぢゅッッ!♡♡ べるべるべるべるべるッッ!♡♡♡

カリカリカリカリッ♡♡♡ カリカリカリカリカリ
ッ♡♡♡♡

また、体が突っ張っていく♡♡

乳首とクリトリスの気持ちいいのが頭の中まで伝わっ
ていって、もうイくことしか考えられなくなって♡♡♡
♡

足の指と手を握り込んだ♡♡ それからお腹の下を力
ませる♡♡♡♡

「お♡♡♡ お、ほッ♡♡♡ イくっ、イっちゃいます
……！♡♡♡♡ ん”、くッ♡♡ ………おッ、おッ” お
ッ” おッ”、いくっ、いくいくいくいく……、ン”
お、おおおおお！！！！♡♡♡♡♡♡」

今度は自分の口を塞ぐ余裕もなかった……♡♡♡♡
私は二人に乳首とクリトリスを差し出し、仰け反って
いった♡♡♡♡♡

ビク、ビク♡♡
体が小さく痙攣する♡♡♡♡

私の体から体を起こした二人は今まで見たことのない
ような表情をしていた♡♡

「オス」だ♡♡♡♡♡

いつも爽やかな笑顔の蒼介さんは欲しいものに狙いを
定めたように目を輝かせ、いつもなら何を考えているの
か分からない律さんの目は、欲を隠すことなく私を見つ
めている。

それから二人とも、既にちんぽを勃起させ布を押し上
げていた♡♡♡♡♡

相変わらずテントの中は打ち付けるような雨の音でいっぱい♡♡

その音の中、律さんがズボンを下ろすと、ぼろん♡と硬さを感じさせるちんぽが跳ねた♡♡

「これ見ても拒否しないってことは…、いいんだよね」

律さんがちんぽをゆるくしごきながら私を見下ろす♡

「夢子、オレも手伝ってあげる♡♡♡」

ちんぽに釘付けになってしまった私の後ろに蒼介さんが入ってきて私を抱きしめた♡

その手は後ろから私の膝を広げてしまう♡♡

濡れたおまんこが律さんに向けられている♡♡♡

「……、挿れるから」

足の間に体を差し込んできた律さんの、先走りで濡れたちんぽが♡ 入り口に触れて♡♡

ぬ♡ ちゅう……♡♡♡

ゆっくりとそこを割った♡♡

亀頭で広げられ、そのまま真っ直ぐに入ってくる♡♡

「……あ♡♡ は、あ♡♡」

「夢子ちゃんの中、あつ……」

さっきまで指が入っていたところ、それよりも遥かに太いちんぽで広げられるだけで全身がぞわぞわと栗立ってしまう♡♡

膣壁を入り口から奥へと撫でていって♡

律さんは少しだけ私のほうに傾きながら覆い被さるよ
うにちんぽを進めた♡♡

「んァ♡♡ ああ♡♡」

「……、あーあ、入っちゃった」

律さんの腰が私の太ももの間にぴったりと埋まって、
一瞬、ぐっ♡♡と押し当てられた♡♡♡

深いところ、ちんぽが触っているのを分からせられる
ように♡♡

「夢子♡ ちんぽ気持ちいい？ あとでオレのもちゃんと
味わってな♡♡♡」

蒼介さんは後ろから私のこめかみや頬に何度もキスし

て、私の上半身を抱きしめている♡♡

そのうち律さんはゆっくりと動き始めた♡♡♡

ぬちゅ♡ ぐちゅ♡ ちゅ♡

「……、っ♡ あ♡♡♡」

ギチギチに広げられた膣壁がちんぽにひきずられる♡
♡

ぐちゅ、ぐちゅ♡♡ ぐちゅっ♡♡

「あ、あぁっ♡♡ ん♡ ツ♡♡」

最初は様子を伺うような強さだったそれが、だんだんと遠慮がなくなって♡♡♡

ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡

♡

「ア♡、あッ♡♡ はッ、あ♡♡♡ あ♡♡」

押し込むようにちんぽは奥を突いた♡♡♡

ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡

♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡

「あ♡、ツんああ♡♡ あ♡♡あ♡♡あッ♡♡」

「……夢子ちゃん、奥突くとしっかり締めてくれて……。気持ちいいんだ？」

ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡

♡ ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ♡♡

律さんの顔が降りてきて、頬にキスしてきた♡♡

その反対側からは相変わらず蒼介さんが音を立てて首筋や頬の薄い皮膚を啄んでいる♡♡

「き、きもち、いいです……♡♡♡ イったのに、……♡♡ ちんぽ♡♡ きもち……♡♡♡」

「よかった、嬉しい」

「夢子、こっちは？ こっちはオレがしててあげるよ♡♡♡」

さっきみたい、お腹に巻かれていた蒼介さんの手が、今度は生の乳首を捕らえた♡♡

親指と中指で乳輪を広げるように押さえ込んで、その真ん中の勃起したままの乳首を人差し指で、

カリッ♡♡

引っ搔く♡♡♡♡

「……ツツツお♡♡♡♡」

乳首の先端から鋭い快感が体を走っていく♡♡♡♡

「おまんこまた締まった……。良かったね、おまんこも乳首も気持ちよくしてもらえて。でも今は俺のちんぽ感じてくれないと困るよ？」

ばちゅッ！♡♡♡♡

いきなり律さんのちんぽの圧が増して、体が押された♡♡

背後の蒼介さんの胸に押し付けられる♡♡

律さんは止まらず、そのまま強く押し込むようにピストンを続けた♡♡

ばちゅッ！♡♡ ばちゅッ！♡♡ ばちゅッ！♡♡ ばちゅッ！♡♡ ばちゅッ！♡♡ ばちゅッ！♡♡

「おッ♡♡ お、お、ッ♡♡ ……つよ♡♡ 律、さ、……、ちん、ぽ♡♡ つよい、です……っ”♡♡ ほ、ッお”お♡♡♡」

「夢子ちゃんのこと、ちんぽでイかせたいから……。いっぱいここ突いてあげるからね」

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡

ゆッ！！♡♡♡

また深くなったあ……♡♡♡

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！
！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡

おまんこの奥、ちんぽぶつけられて♡ 壁は硬い幹で
擦られて♡

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！
！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡

たまらなくなる♡♡♡

蒼介さんに背中を押し付けてちんぽがくれる快感で頭
の中がいっぱいになってしまう♡♡

「夢子、オレも負けてないから♡♡♡」

「ほオ` ……！！♡♡♡♡♡」

ピンピンピンピンッ！♡♡♡

ピピピピピピピッ！♡♡♡ ピピピピピピピッ
ッ！♡♡♡

乳首を搔いていた蒼介さんの指が♡♡

勢いよく勃起を上下に弾く♡♡♡

素早く乳首の付け根が引っ張られる感覚に体が本能的
に逃げようとするのを止められない♡♡♡♡

前からは律さんに♡♡

後ろからは蒼介さんに♡♡

それぞれ耳や首すじ、頬にキスされまくりながら、私は二人の間に責められ続けた♡♡♡♡♡

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡
ピピピピピピピッッ！！♡♡♡ ピピピピピピピッッ！！♡♡♡

「お、おッ♡♡ んお、おおお♡♡♡ だめ、りょうほ、いっしょ、は……♡♡♡♡」

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡
ピピピピピピピッッ！！♡♡♡ ピピピピピピピッッ！！♡♡♡

「あ——……、まんこ締まってく、気持ちいい……」

「夢子いい顔してる♡♡ ちゃーんと乳首も意識して♡ えっちに勃起しちゃったエロ乳首♡ ぷるぷるさせられるの自覚して♡♡」

ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡ ばちゅッ！！♡♡♡
ピピピピピピピッッ！！♡♡♡ ピピピピピピピッッ！！♡♡♡

「ン” おツツ、お…！♡♡♡ おおおツツ♡♡ や、ア”
っ♡♡ あツツ、んああああツ” ！♡♡♡♡♡」

気持ちいいのがお腹の奥から溜まっていく♡♡

ビクビクと反応してしまう体は前から後ろからもホ
ールドされ、ひたすらおまんこを突かれ、乳首を弾かれ
る♡♡♡♡

ばちゅ……ツツ！！♡♡♡♡♡

ばちゅんツ！！♡♡♡ ばちゅんツ！！♡♡♡ ばちゅ
んツ！♡♡♡ ばちゅんツ！♡♡♡

「お” ♡♡ おツ♡♡おツ♡♡ お” ツお” ツお” ツ♡♡
♡♡ イ、っちゃううう……♡♡♡♡ 奥突かれてイっち
ゃう♡♡ ほ、お” ん……っ♡♡♡♡」

一突き一突き、律さんのちんぽが奥に押し込まれて♡
♡♡♡

耳元でする興奮した二人の吐息とキスの音に、私は二
人の腕にしがみついた♡♡

ばちゅんツ！！♡♡♡ ばちゅんツ！！♡♡♡ ばちゅ
んツ！♡♡♡ ばちゅんツ！♡♡♡

ピピピピピピピッ！！♡♡♡ ピピピピピピピッ

ッ！♡♡♡

ばちゅんッ！！♡♡♡ ばちゅんッ！！♡♡♡ ばちゅんッ！♡♡♡ ばちゅんッ！♡♡♡

ピピピピピピピッッ！♡♡♡ ピピピピピピピッッ！♡♡♡

「夢子ちゃんのイきそうなおまんこ、覚えちゃった。もともっと…」

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅッッッ！！♡♡♡♡♡

「夢子の本気で気持ちい～って顔♡♡ かわいい♡♡♡」

ピピピピピピピッッ！♡♡♡ ピピピピピピピッッ！♡♡♡

「だ、だめ、え”♡♡♡♡ イく、いくっ♡♡ イく、…………ふ、……ッッッ、ううううううう！！♡♡♡♡♡♡」

絶頂に首を反らせ、蒼介さんの肩に後頭部がぶつかった♡

そのまま肩に頭を押し付け、ビクンッ♡ビクンッ♡と
体を震わせる♡♡♡♡

ちんぽでいった深い絶頂に頭がぼーっとする♡♡♡♡

「よしよし♡ じゃあ今度はオレのちんぽな♡♡ 早く早く、」

うまく思考が働かないまま蒼介さんに抱えられた♡♡
律さんに受け止められ、私は床に寝た律さんの上で四
つん這いにさせられた、けれど、手に力が入らなくて律
さんに倒れ込んだ♡

「……夢子ちゃん、可愛かったよ」

すぐ目の前にある律さんの唇♡

律さんは私の後頭部を手のひらで引き寄せ、そのまま
私の唇に押し付けてくる♡♡

「え、キスしてんのずる！ 夢子、キスよりオレのちん
ぽちゃんと受け止めてよ♡♡♡♡」

ずぶ、…………パンッ♡♡♡♡

「…………♡♡♡♡♡♡♡♡」

後ろから一気に押し込まれた蒼介さんのちんぽ♡♡♡
♡♡

それから、大きな蒼介さんにはテントの天井は低いんだろう、私の背中に抱きつき、そのまま腰だけを前後に振り出した♡♡♡♡

■製品版にて♡